

図書館の魅力

芝 治子

「図書館」というと何を思い浮かべるか、友人たちと話したことがあります。小学校の頃に突然出現した図書室に驚いたという友人は、白髪の品の良い図書先生の名前まで覚えていたというし、図書館とは静粛にしなければいけない所と思い、すごく緊張しながら絵本を読んだという人もいます。大学に入學して初めて図書館というものの存在を知ったという友人は、読書は趣味じゃないというし、眼鏡を二つ以上も使い分けている活字中毒の友人は、図書館めぐりが趣味で、大学図書館から国会図書館、はてはパリの国立図書館や大英博物館読書室の様子、あるいは24時間稼働しているアメリカの大学図書館の機能まで話したらきりがありません。図書館との付き合い方には標準というものがなさそうだと、それがこの時の結論でしたが、ともかく、我々が大学を出た頃からの図書館の変貌ぶりはかなりなものじゃないかしら、というのが共通の感想でした。

私が大学で出会った図書館は、本が置いてあって、音源としてはレコードくらいでした。資料を探すのも、小さな引き出しに詰まっているカードを繰って、それをメモして……と、なかなか大変な作業だったけれど、カードを繰りながら思いもしなかった資料を見つけることもあって、研究者のような気分にもなれたのでした。今ではコンピュータで簡単に検索ができるので楽といえば楽ですが、目的の資料に行き当たらないので、効率が良いけれどなんとなくつまらないと思うときもあります。レコードが消えていき、他のさまざまなメディアが現れては消え

ていき、カセットやVCDやLDなどはどうなるのだろうかと不安を抱えながら、ともかく変化に追いついていかなければ、と、結構ややこしい時代を生きているというのが実感です。

私にとって、今のところもつとも利用している資料はCDといえるでしょう。CDが音源として一般的になったのはそう古い事ではありません。初めて手にしたCDが何であつたか、残念ながら思い出せませんが、とにかく小さく、扱いがきわめて簡単という点で、大感激したのがついでこの間のような気がします。昔のレコードが次々とCD化され、貴重なライブ演奏を、いつでも味わうことができるのは、本当に嬉しいことです。増え続けるCDの中から、「音楽の遺産」として次世代へどんなディスクが受け継がれていくのでしょうか。ともかく情報に流されずに、自分にとって必要なもの、大切なものを判断する耳をしっかりと持たたいものです。

近頃はゆっくり時間をかけながら探索し、図書館にいる時間を楽しむ余裕はほとんどありませんが、それでもなぜか図書館にいと、不思議に心豊かな気持ちになります。それはたぶん何か新しいもの、面白いものを発見できるかも、という期待を抱かせてくれる魅力がそこにはあるからでしょう。

今の資料がいつまで使えるのか、未来に何が来るのか、どう変わっていくのか等、なかなか予測できない状況ですが、これからも時間を見つけては、図書館での思いがけぬ出会いを楽しみにしていきたいと思えます。